

8月総評 西躰かずよし

今月も、魅力的な作品が多くあった。そのなかでも特に気になった作品に触れてみたい。

老女のてのひらに
星月夜 と
書いてありました。

翠（東京都）

てのひらに書かれた文字は老女にとって大切なものであったに違いない。星月夜のあとの一マス空けや行替えは効果的で、描かれる一コマから様々な物語が想起できる。著者のやわらかな感受性が感じられる他の作品に「つみきのまちで／はじめての告白をする」がある。

自転車に桜花びらついていて僕に
はさびしいやわらかい だった

永井 貴志（京都府）

「さびしいやわらかい だった」は文法的に捻れていて、例えば、平岡直子の「三越のライオン見つけられなくて悲しいだった 悲しいだった」という短歌を連想するが、伝えたいことが文法を追い越すことはあるかもしれない。そして、そうした表現をダイレクトに取り入れることが出来るのも口語で作品を作ることの魅力だろう。ここではその捻れこそが作中の人物の感情の中心に置かれている。

窓を開けくしゃみを二つ春が来た

猫谷圭希（広島県）

子供は誰でも芸術家といったのはピカソだろうか。子どもの俳句は大人には書けないようなところがあるが、この作品からは子どもの部分を大切にしまってきた書き手の姿が垣間見える。同じ著者の作品に「晴れた日の瀬戸内海はよく笑う」といったものがある。

wが草なのxが花野なの

大橋 弘典（群馬県）

こういう作品に出会うと、作品の自立性ということを考えさせられる。書かれた映像から、書いた者の背景を物語るということはよくある（例えば正岡子規の「いくたびも雪の深さを

尋ねけり」という句では、読者にその描写をつうじて描写した人の状況を想起させる)のだが、この作品はそうした語りを拒絶しているかのようである。書かれる言葉のみずみずしさのみで作品を成立させようとしているところは現代的で、付け加えるならば、そのみずみずしさを担保するために作品の構造は良く考えられたものとなっている。

流れ星を見つけた。

金魚を埋めた場所を思い出す。 まちりこ（埼玉県）

生まれては消える流れ星を見つけて、金魚を埋めた場所を思い出す。それは生と死の往還を思い起こさせる。生は空間軸で捉えるなら永遠であっても、時間軸においてはどこまでも有限で、だからこそ美しいのかもしれない。

夜の絵を描ける人に恋をした
その日は夜のことを調べた 白野（新潟県）

その人が描く夜のことを調べるという喩えは、恋する者の知りたいという思いをまっすぐに表現している。作品から漂う静謐で清潔な印象は、そのまっすぐな思いに焦点が当たっていることに起因するだろう。